

スィフティと ノボ

スィフティは、大切なメッセージを遠い所まで飛んで行って届ける伝書バトです。飛ぶのが速くて仕事をてきぱきとこなすので、スィフティという名前が付けられました（スィフティとは、英語で「速い」という意味です）。たくさんの大会でも勝ちぬいたので、この辺りでは最高に優秀な伝書バトの一羽でした。スィフティはそれをみんなに言いふらしては、じまんしていました。

ノボはふつうのハトで、友だちと一っしょに公園でくらしています。そこは、スィフティが速達便で通る飛行ルートの近くでもありました。ノボは、飛びぬけてつばさが強いわけでもなく、特別な飛行記録もありません。公園にいるほかのハトと変わらない、ごくふつうのハトです。



ノボは、ほかのハト仲間が^{なかま げんき た もの}元気で食べ物も
^{じゅうぶん}十分あるか^{み とど}どうかを見届けたりなど、
^{よろこ}喜んでみんなのめんどうをみていました。
^{まいあさ}毎朝みんなよりも^{はや お こうえんじゅう と}早く起き、公園中を飛び
^{まわ}回って、パンくずやピクニックの^{た のこ}食べ残し
などが^{み まわ}ないかを見回っていました。それから
みんなの^{もと}元にもどって^き来て、ごちそうの
ある^{ところ}所にみんなを^{あんない}案内するのです。こうした
やさしい^き気づかいのおかげで、ノボはほかの
ハトたちに^す好かれていました。

その^{いっぽう}一方、スイフティには^{とも}友だちが
あまりいませんでした。自分が^{じぶん}どんなに
^{はや と}速く飛べるかを見せびらかしてばかりいて、
だれもついていけないので、^{けっきょく}結局いつも
ひとりぼっちで^と飛ぶことになってしまいます。

「つかまえてみろよ!」と言いながら、
スイフティは、^{まいにち}毎日のように^{こうえん}公園のハトを
あざけていました。ノボの^{とも}友だちは、
スイフティがいつも^いじまんばかりするので、
いや気がさしていました。

「ノボ。スイフティって、すごくうぬぼれが
^{つよ}強くて、むかつくんだ。」^{いちばん わか}一番若いハトの
ジェイミーがぼやいていました。

「きっと、^{かれ}彼はさびしいんだよ。^{とも}友だちが
ほしいんだろう。」ノボは、いつも^{こた}そう
答えるのでした。



ある日の ことです。

スイフティが ほかの ハトたちを
からかうのも、^ど度を こして
きました。いばるだけでなく、
ほかの ハトたちを デブだとか、
なまけ者^{もの}だとか ^い言^わって、笑^{もの}い物に
したのです。ハトたちは いやな
気分^{きぶん}に なって、スイフティに、もう
2度と ^ど公園^{こうえん}に 来るなと ^い言^わったの
です。スイフティは、^{こうえん}公園なんて
いくらでも あるさと ^い言^わいながら、
飛^とび去^さって 行^いきました。

ある ^は晴^{わた}れ渡^ひった 日、スイフティは
速^{そく}達^{たつ}便^{びん}で 長^{なが}い 飛^ひ行^{こう}の とちゅう、
こ木^こかげに おりて 休^{やす}もうと しました。
ところが、まいおりた すぐ そばに
のら犬^{いぬ}が かくれていたのに 気^きが
つきませんでした。犬^{いぬ}は、すぐさま
前^{まえ}足^{あし}を ふり上げて、バシッ！
スイフティは すぐに 飛^とび立^たち
ましたが、左^{ひだり}の つばさに 大^{おお}けがを
してしまいました。帰^{かえ}り道^{みち}、ノボの
住^すんでいる ^{こうえん}公園を 過^すぎるころには、
もう ^{ちから}力が つきていました。

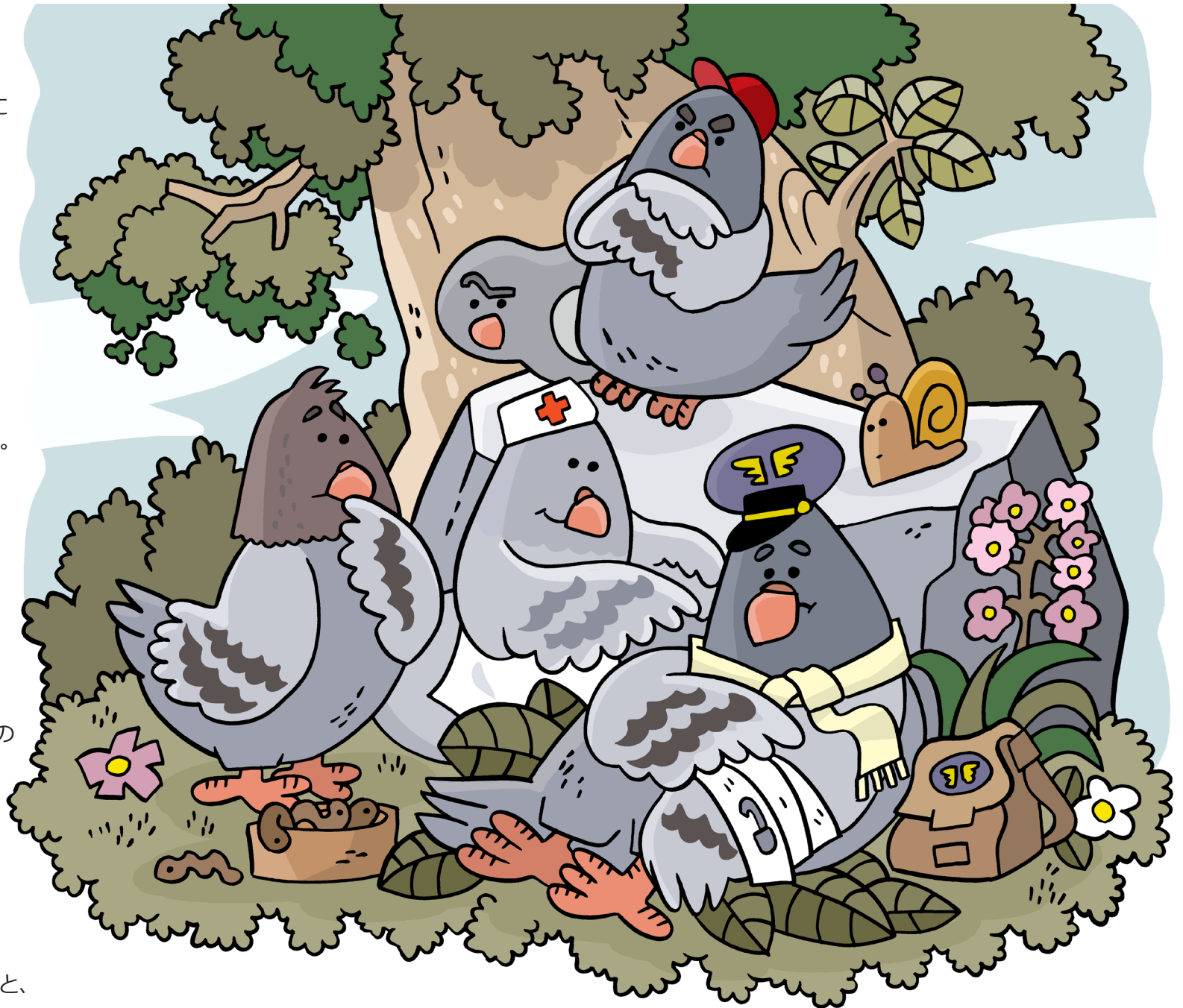


公園のハトたちが見ていると、
スイフティは よろよと 低空飛行を
して、その後 公園内の 道の 真ん中に
ドサッと おりて すわりこんでしま
いました。ノボは、何かが 変だと
気づいて さげびました。

「スイフティ! だいじょうぶかい?
みんな、手伝って!」 ノボと 仲間の
ハトたちは すぐに 来て、スイフティを
道路から はなれた 人目につかない
安全な 場所に 引っぱって 行きました。
みんなは 何日かの 間、スイフティの
ケガの 手当てを したり、食べ物
も 持ってきてあげたり して、世話を
しました。

なかには、スイフティの めんどろを
みてあげる ことについて、いい 顔を
しない ハトも いました。「スイフティの
世話を するなんて、いやだよ。」
ジェイミーは ノボに ブツブツ
言っていました。「だって、ぼくたちに
意地悪ばかり してたんだもの。」

「たぶん 彼は、どう ふるまったら
いいのか、分かってなかったんだよ。」と、
ノボが 答えました。



なんにち
何日かすると、スイフティは げん き 元気に なって、
すこ うれ
少し 動けるようになりまし。ノボは、ずっと
スイフティの そばに ついていました。

「げん き 元気に なって、ほんとう よ
つばさの ちょうし 調子は どうだい?」

スイフティは つばさを のばしてみようと
しましたが、いたくて すぐに ひっこめました。
そして ため息を つきました。

「むり きんもつ げん き
無理は 禁物だな。元気に なるまで、
ここに いて いいんだからね。」

「ぼくは いま きみ たい おち
「ぼくは 今まで、君たちに 対して 思いやりが
なかったのに、どうして そんなに しんせつ
くれるの?」

ノボは ほほえんで いました。「かみさま
ぼくたちに おたがい しんせつ おち ち
親切で 思いやりを 持って
ほしいと 望んでおられるからさ。そう するなら、
じんせい
人生は すばらしい ものになって、まいにち
喜びで いっぱいになるからだよ。」

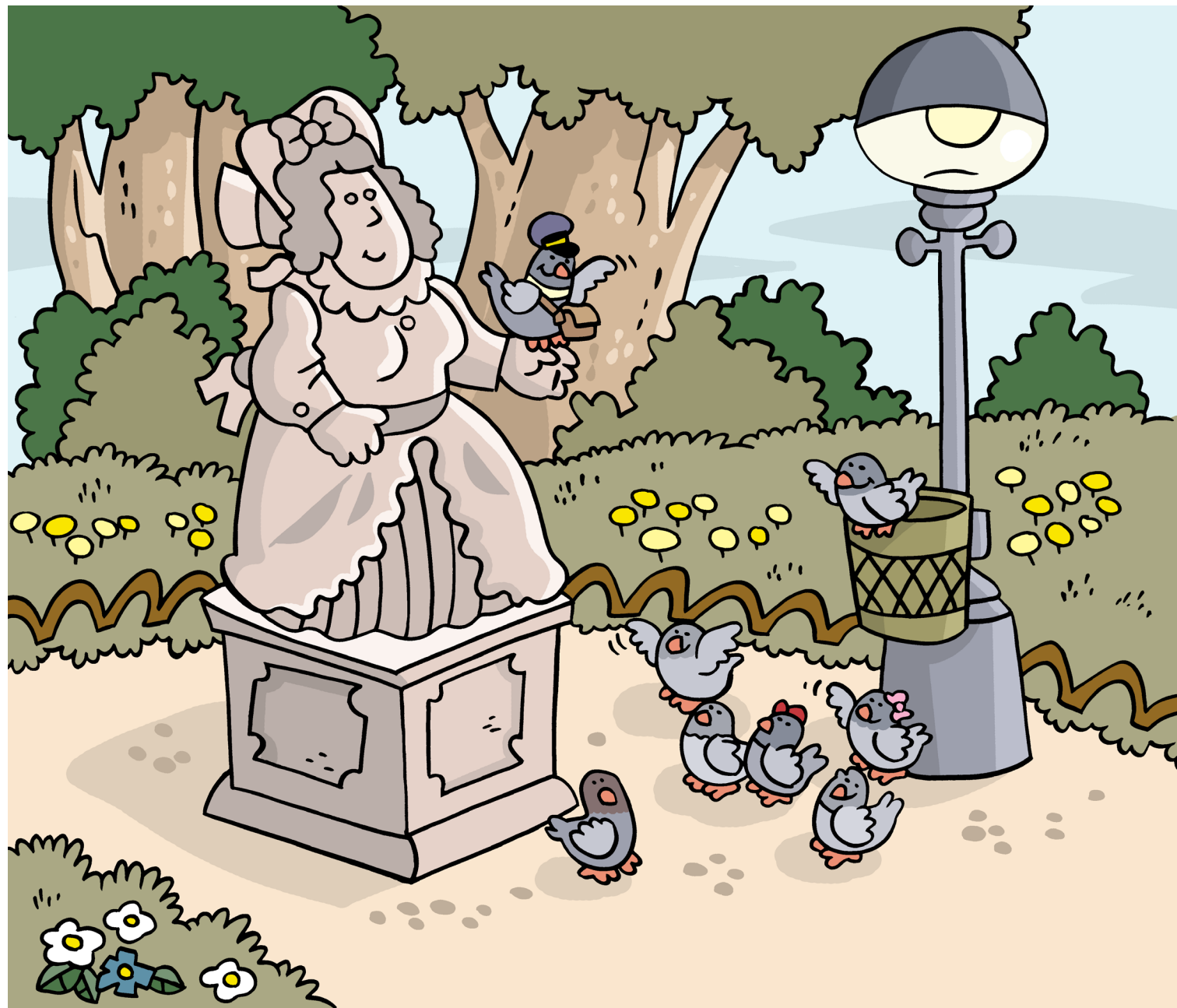
しゅうかん
1週間も すると、スイフティは げん き 元気に なって、
また と 飛べるようになりまし。こうえん で
前に、スイフティは みんなに あやまりました。

きみ
「君たちは みんな、ぼくに 良い 教訓を 教えて
くれたよ。ぼくは いばってばかりで いじわる
けど、ケガをした ときには みんな、ぼくの
せわ
世話を してくれたよね。ぼくに たす ひつよう
助けが 必要な
ときには、すぐに たす き
助けに 来てくれた。ぼくは、
じぶん
自分が はずかしいよ。」



こんかい　じ　こ　じんせい
今回の 事故は ぼくの 人生で
さいあく　で　き　ごと　おも
最悪の 出来事だ と 思ってたけど、
いま　あい　ゆうじょう
今は、愛と 友情が どんなに
すばらしい ものが 分かったんだ。
ぼくも、みんなみたいに 親切に
なりたいたよ。ほんとう　ありがとう！
ノボの そばに 立っていた
ジェイミーが、ノボに ささやきました。
「ノボが 言ったことは、
ほんとう　しんせつ
本当だったね！ 親切に してあげたら、
かれ　しんせつ
彼も 親切な ハトに なったね。」
ノボが まえ　で　い　いました。
「通りが かったら、また 寄って
くれよね。いつでも かんげいするよ！」
スイフティが と　た　こうえん
飛び立つと、公園の
ハトたちは みんな、つばさを
ふりました。スイフティは、ノボが
じ　ぶん　しんせつ
自分に 親切に してくれたように、
かれ　しんせつ
彼も ほかの みんなに いつも 親切に
する　ことを　やくそく　と　さ
することを 約束して、飛び去って
いきました。

お
終わり



寄稿：アリーヤ・スミス、トム・Eの著書の編集　絵：ディディエ・マーティン　デザイン：ステファン・ミラー

出版：マイ・ワンダー・スタジオ　Copyright © 2013年、ファミリーインターナショナル

<http://www.mywonderstudio.com/0-5/2013/7/8/swifty-and-nobo.html>